



Title	アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容
Author(s)	小内, 透; 長田, 直美
Description	第9章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 169-181
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/48981">https://hdl.handle.net/2115/48981</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_011.pdf



## 第9章 アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容

小内 透

北海道大学大学院教育学研究院教授

北海道大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員

長田 直美

北海道大学アイヌ・先住民研究センター非常勤職員

### はじめに

明治期以降、アイヌの人々は和人との混血がすすみ、アイヌの血は薄れ、外見も和人と見分けがつかない人々が増えている。アイヌの伝統文化に触れる機会も少なく、アイヌとしての意識を持つこと自体が困難になってきている。

しかしながら、今回のインタビュー調査では、アイヌ民族としての様々な意識のありようが浮かびあがってきた。調査対象者の育った環境、歩んでいる人生が実に多様であり、その多様性はアイヌとしての意識に反映されている。アイヌであることに肯定的な者もいれば、そうでない者もいた。アイヌとしてのアイデンティティは一様ではなかった。

このような状況をふまえ、本章では、生活史の分析を通じて、調査対象者のアイヌとしてのアイデンティティの内実とその形成・変容の要因について明らかにし、アイヌとしてのアイデンティティの未来について検討する。

### 第1節 アイヌとしての意識の内実と変化

アイヌとしてのアイデンティティの内実を分析していく上で、アイヌであることに肯定的な意識を持っているか否かという点が重要である。なぜなら、こうした意識がアイヌ性に関わる様々な要素を包括して現れてくる結果と見なせるからである。

そのため、各自のインタビュー結果全体にもとづいて、現在アイヌであることに対する意識を、以下の観点から、「肯定的である」、「否定的である」、「どちらでもない」に分類した。

「肯定的である」は、「アイヌであることを誇りに思う」「アイヌであると（堂々と）言える」「アイヌ文化を広げたい」など、現在アイヌであることに肯定的な人々の意識である。

「否定的である」は、「アイヌであると言わない」「アイヌであることにコンプレックスを持っている」「嫌なイメージがある」など、アイヌであることを隠したいと考えており、アイヌであることに否定的な人々が持っている意識である。

「どちらでもない」は、「民族のことは気にしない」「アイヌであることとくに意識する必要はない」と考えている人々の意識になる。なお、配偶者がアイヌである和人の場合もアイヌの人々と同様の観点から、分類した。

表9-1が、分類の結果である。ここから、アイヌであることに対する意識に関しては、全体として、「否定的」な者は少なく（6.3%）、「どちらでもない」が53.6%と最多で、それに次いで「肯定的」な者が40.2%となっていることがわかる。アイヌに対する差別が激しく、アイヌであることに否定的で自ら同化を望む者も多かったかつての時代とは大きく異なっている。こうした傾向には、地域や性別による違いはあまりみられなかった。時代の変化がアイヌ自身のアイデンティティ

表9-1 アイヌであることに対する現在の意識

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	6	20.7	3(1)	10.3	20(2)	69.0	29(3)	100.0
壮年層	15	35.7	2	4.8	25(7)	59.5	42(7)	100.0
老年層	24(2)	58.5	2	4.9	15(4)	36.6	41(6)	100.0
合計	45(2)	40.2	7(1)	6.3	60(13)	53.6	112(16)	100.0

注) ( ) 内は和人の内数。

のありように少なからぬ影響を与えていると考えられる。

これを、世代別に見ると、「肯定的」な意識をもつ者の割合は、老年層で58.5%、壮年層で35.7%、青年層で20.7%となっており、世代が若くなるにつれて減っている。逆に「どちらでもない」層に属する者の割合は、青年層では69.0%、壮年層では59.5%、老年層では36.6%となり、若い世代は中立的な意識に向かっている。「否定的」である割合は老年層と壮年層ではほぼ等しく、青年層で10.3%と他の世代と比べて高い。世代が若くなるにしたがって、「肯定的」な者の比率が減少し、「どちらでもない」者や「否定的」な者の比率が増加している。この結果から、若くなるにつれて、アイヌとしてのアイデンティティを持つことが難しくなっていることがわかる。

だが、意外なのは、世代が上がるにしたがって「肯定的」な者が多くなることである。とくに老年層では「肯定的」な者が6割弱に達している。時代をさかのぼればさかのぼるほど、アイヌの人々にとって生きる環境が厳しかったことを考えると意外な結果である。

しかし、これはあくまでも現在の意識である。現在の意識がかつてから一貫したものとは限らない。そのため、かつてはどのような意識をもっており、それが変わらずに今の意識につながっているのか、それとも意識自体が変化して現状がもたらされたのかを検討する必要がある。

表9-2は、この点を確認するため、アイヌであることに対する過去の意識と現在の意識の関係を世代別にまとめたものである。なお、過去の意識については、「アイヌであることにどのような気持ちを持っていたか」という観点から「肯定的であった」「否定的であった」「どちらでもなかった」に分類した。配偶者がアイヌである和人の場合、配偶者と結婚する前に「アイヌ民族に対してどのような意識を持っていたか」によって判断した。

ここから、全体的な傾向を見ると、現在「肯定的」な者の場合、「どちらでもなかった」から変化した者が46.7%ともっとも多く、それに次いで、「否定的」から「肯定的」になった者が28.9%となっている。過去から一貫して「肯定的」である者は24.4%で、もっとも少ない。それだけ、「肯定的」な方向への変化が大きいといえる。これに対し、現在「否定的」な者の場合、1人だけが過去に「肯定的」であり、それ以外は過去も現在も一貫して「否定的」となっている。現在「どちらでもない」には、かつて「肯定的」だった者はいない。一貫して「どちらでもない」が76.7%と主流で、かつて「否定的」であったが「どちらでもない」に変化した者が23.3%である。

このように、過去の意識が「否定的」や「どちらでもなかった」場合でも、現在は「肯定的」に変わっている人々がいることがわかる。また、過去に「肯定的」であって、現在は「否定的」や「どちらでもない」という逆向きの変化は1人を除き、見られない。明らかに、過去と比べ、現在の意識は「肯定的」な方向に変化している。

表9-2 アイヌであることに対する過去と現在の意識

単位：人

世代	肯定的である			否定的である			どちらでもない		
	過去	現在	割合	過去	現在	割合	過去	現在	割合
青年 (29人) 3※	肯定的であった	2 (2)	33.3%	肯定的であった	0		肯定的であった	0	
	否定的であった	1 (1)	16.7%	否定的であった	3 (1)	100.0% 1※	否定的であった	1	5.0%
	どちらでもなかった	3 (1)	50.0%	どちらでもなかった	0		どちらでもなかった	19 (2)	95.0% 2※
壮年 (42人) 7※	肯定的であった	6 (6)	40.0%	肯定的であった	1 (1)	50.0%	肯定的であった	0	
	否定的であった	3 (3)	20.0%	否定的であった	1 (1)	50.0%	否定的であった	8 (6)	32.0%
	どちらでもなかった	6 (6)	40.0%	どちらでもなかった	0		どちらでもなかった	17 (4)	68.0% 7※
老年 (41人) 6※	肯定的であった	3 (3)	10.3%	肯定的であった	0		肯定的であった	0	
	否定的であった	9 (9)	37.5%	否定的であった	2 (2)	100.0%	否定的であった	5 (5)	33.3%
	どちらでもなかった	12 (10)	50.0% 2※	どちらでもなかった	0		どちらでもなかった	10 (6)	66.7% 4※
合計	肯定的であった	11 (11)	24.4%	肯定的であった	1 (1)	14.3%	肯定的であった	0	
	否定的であった	13 (13)	28.9%	否定的であった	6 (4)	85.4% 1※	否定的であった	14 (11)	23.3%
	どちらでもなかった	21 (17)	46.7% 2※	どちらでもなかった	0		どちらでもなかった	46 (12)	76.7% 13※

注) 1.※印は和人数、( )内は幼少期・子ども時代にアイヌ伝統文化、生活様式にふれた経験のある人の内数。  
2.※は各世代の現在の各意識に占める割合。

各世代別に見ていくと、「否定的」から「肯定的」に変化する割合は、老年層では37.5%、壮年層は20.0%、青年層では16.7%と世代が上がるほど高い。「否定的」から「どちらでもない」に変わって行く割合も、老年層で33.3%、壮年層で32.0%、青年層で5.0%と上の世代であるほど高くなっている。「肯定的」な方向への変化は、古い世代の方に強く現れており、これが、すでに見たような、上の世代になるにしたがって現在「肯定的」な意識をもつ者が多いという現実をもたらしているといえる。

ただし、「肯定的」から「どちらでもない」あるいは「否定的」への変化や「どちらでもない」から「否定的」といった、「否定的」な方向への変化は、世代が若くなくても増加することはない。これに該当するのは、「肯定的」から「否定的」に変わった壮年の1人のみである。青年層の意識が上の世代よりも「肯定的」な方向へ変化していないのは、「否定的」な方向への変化があるからではない。「否定的」な意識をもっている3人や「どちらでもない」19人の意識に変化が見られないからである。

## 第2節 アイヌとしての意識の形成過程

それでは、なぜ世代が上になるにしたがって、アイヌであることに対する意識が「肯定的」な方向へ変化し、逆に青年層の意識は変わらないのであろうか。以下、この点について、世代別の具体的な生活史を現在の意識ごとに検討することによって明らかにしていこう。

## 第1項 老年層

### (1) 「肯定的である」

老年層のうち、現在アイヌであることに「肯定的」である者は41人中24人である。女性の場合は主に歌、踊り、刺繍などの文化活動に参加しており、男性の場合はアイヌ関係の団体の役職についていたり、儀式の際に役割をつとめたりしている。何らかの形で現在アイヌの文化活動に関わっている。実際に木彫りを仕事としている人もいる。そして精神性を大切にすること、アイヌの伝統文化の継承を考えていることが語られている。これらが、現在アイヌであることに「肯定的である」と分類された所以である。

これら24人の意識の形成過程を見ると、和人配偶者を除くすべての人が、アイヌの伝統文化や生活様式を経験している（表9-2参照）。幼少期に祖母や両親などによりアイヌの伝統文化や生活様式が身近なところで実践されていたことやアイヌの人々同士の交流が多かったこともその背景にある。それらは、「祖母が入れ墨をしていた」「母や祖母がゴザを編んでいた」「父親が木彫りをしていた」「祖母がアイヌ語を話していた」などのエピソードとして語られている。

これら24人の現在に至るまでの意識の変化について見ると、3人は以前からアイヌであることに「肯定的」であり、9人は以前は「否定的」、12人はその「どちらでもない」という結果になった。

以前より「肯定的」であった3人は、幼少期にアイヌであることであまり差別を受けていない。そのため、現在まで一貫してアイヌであることに「否定的」な意識を持たなかったと考えられる。

一方、以前「否定的」であった9人は、幼少期や学校時代にアイヌであることでいじめられたり、バカにされたりという経験を持っている。その後の人生において、「配偶者がアイヌの伝統文化を実践している人だった」「毛深いことでアイヌであることを気にしていたが、夫が気にしない人だったので、誇りを持てるようになった」など、理解ある配偶者の存在が「否定的」な意識を変化させたようである。その他、積極的にアイヌ文化活動に参加したり、アイヌ関係の団体で何らかの役割をつとめたりするようになったことがきっかけで、アイヌであることに「肯定的」になっている者もいる。また、「小さい頃はアイヌ民族であることが情けなかったが、昔と違って今はみんなに知られ、理解されている」という発言もあり、アイヌの人々を取り巻く社会の認識変化の影響は大きい。身近な人の理解、アイヌ文化活動への参加、アイヌ関係団体への関与、社会の認識変化が「否定的」な意識を「肯定的」な意識へ変化させる要因になったといえる。

「どちらでもない」の12人では、差別は受けた経験があるものの激しい差別ではなかった人が多い。「否定的」だった人々と同じように、「生活に余裕が生まれ、踊りに参加できるようになった」など行事に参加する機会を得たことが改めてアイヌとして「肯定的」な意識を持つきっかけになっている。そのうち1人の和人は、「結婚前はとくにアイヌについては意識していなかったが、夫がアイヌで、夫も義父もアイヌの風習を大事にしているため、アイヌのことに興味を持ち知りたと思うようになった」と語っている。アイヌである配偶者(夫)がアイヌとして「肯定的」な意識を持っていたことが、和人(妻)にアイヌとして生きることを選ばせ、現在はアイヌであることに「肯定的」な意識を持たせる要因として働いたケースである。

### (2) 「否定的である」

現在アイヌであることに「否定的」である2人は、過去においても「否定的」であり、アイヌであることの意識に変化は見られない。「肯定的」な人々と同じように幼少期にアイヌの伝統文化

に触れた経験は持っていた。1人は祖母がアイヌであることを嫌っていた。毛深いことにコンプレックスを持っており、結婚後も和人の夫から毛深いと言われ、コンプレックスが消えていない。もう1人は「結婚する時に相手の親からアイヌであることで反対された」と述べており、表面的には差別はなくなり穏やかになってきているが、結婚になると今でもアイヌであることで問題が出てくるなど、社会の根底には差別的なことがあると指摘している。2人とも和人と結婚しアイヌの文化活動に関わる機会は得ていない。身近な社会関係のあり方が「否定的」な意識を持続させていると見てよい。

### (3) 「どちらでもない」

「どちらでもない」の15人のうち4人は和人である。アイヌである配偶者と結婚することでアイヌ民族と関わりを持つようになり、中立的な立場でアイヌ関係の活動に関わりを持っている人もいる。11人のアイヌの人々はアイヌであることは否定しないが、アイヌ、和人と区別することなく民族にこだわらないで生きることを欲しており、アイヌに関係する活動に参加する気持ちはあまり持っていない。

アイヌの人々11人のうち、5人は以前アイヌであることに「否定的」であった。彼ら／彼女らは、幼少期、学校時代に差別された経験を持っている。しかし、5人が共通して「今はアイヌ民族が社会に認められてよかった」と述べている。社会の認識の変化が、「否定的」な意識をやわらげる背景になったと思われる。ただし、「差別されていた頃のことがわだかまりとして残っている」との発言もあり、差別されていた当時の心の傷は簡単に癒やされることはない。他の6人はあまり差別された経験を持っておらず、仕事に関心が向いていたり、実際仕事が忙しかったりして、アイヌの伝統文化と関わる機会を持っていない。

## 第2項 壮年層

### (1) 「肯定的である」

壮年層では42人中15人がアイヌであることに「肯定的」な意識を持っている。15人のうち、8人は現在アイヌ関係の仕事をしていたり、アイヌの伝統文化活動に深く関わったりしている。アイヌであることが精神的な支えとなると述べている人が2人いた。他には積極的にアイヌ関係の活動に参加している身近な人を支援している人や、生活に余裕が生まれ、アイヌの伝統文化に触れる機会を持ちつつあり、機会があれば活動に関わりたいという気持ちを持っている人がいた。

これら15人の場合、アイヌの伝統文化に触れた経験は老年層の人々に比べると少ない。しかし、「アイヌ語を耳にした」、「入れ墨をしているおばあちゃんを見た」、「祖母や母親が着物を縫ったり、木彫りをしたりしているのを見た」など、身近なところでアイヌの伝統文化に触れた経験を持っている（表9-2参照）。

15人の人々の意識の形成過程と現在に至る変化を見ると、6人は以前から「肯定的」、3人は「否定的」、6人は「どちらでもない」であった。

以前から「肯定的」であった6人の中には、小学校の時にはアイヌの衣裳を着て踊ったことがある人や親戚がカムイノミやイチャルパをしていたという人、またアイヌの伝統文化を実践していた祖母との関わりが深かった人などがおり、アイヌの伝統文化にかなり密接に関わった経験を持っている。そして、現在もアイヌ関係の仕事をしていたり、アイヌの文化活動に積極的に関わっ

たりしている。差別についての言及はあまりなく、「学校時代にアイヌと言われることはあっても、いじめだと思っていなかった」、あるいは「毛深いことが気になったが、母親からアイヌ民族は優れていると言われたため恥ずかしいと思わなかった」という発言も見られ、外見的な特徴がアイヌとしての意識にマイナスに影響していない。

かつて「否定的であった」3人は、3人とも幼少期や学校時代にいじめや差別にあっている。そのうち1人はアイヌ関係の仕事を始めたことがきっかけとなり、アイヌ文化に興味を持ち、アイヌであることが恥ずかしいという思いもなくなり、アイヌとして積極的に生きていきたいというように気持ちの変化が見られた。もう1人はアイヌの刺繍や踊りをするようになり、改めてその奥深さに引かれ、伝授していくことが大切と考えるようになっていく。もう1人は差別された経験からアイヌには関わりたくないと考えていたが、子どものことを考えて再び、アイヌの文化活動に参加することになり、「若い頃から活動しとけばよかった」と述べている。3人は共通して差別された経験からアイヌであることに「否定的」であったが、アイヌ関係の活動や伝統文化に触れて、しだいにアイヌであることに「肯定的」になっていったと思われる。3人は幼少期にはアイヌの伝統文化が身近なところにあったため、一度アイヌ関係のことから遠ざかっても、アイヌ文化に再び触れたことが自らのアイデンティティを確立するきっかけになり得たと言えるだろう。

「どちらでもなかった」6人も「肯定的」であった人々と同じように差別された経験はなかった。子どもの頃のアイヌの伝統文化との関わりを持ってはいても、「肯定的」であった人々に比べると全般的により希薄だったと思われる。差別については「アイヌをいじめるというのは時代的になかった」と述べている人もいた。和人、アイヌというように民族性を意識する気持ちはあまりなかったものの、生活が安定してきたことからアイヌ協会に入会するなど、何らかの形でアイヌの関係の活動に参加することで、気持ちに変化が生まれてきたようだ。木彫りなどアイヌの伝統文化そのものに興味を持って取り組んでいる人もいる。現在アイヌの文化活動には参加したいと考えており、文化の継承の必要性も感じている。

老年層、壮年層の人々が、アイヌ文化に再び触れる機会を得た背景には、1997年のアイヌ文化振興法の成立が契機となって、アイヌ文化活動が活発化してきていることがあると考えられる。

## (2) 「否定的である」

現在「否定的」である2人は、それほど強く「否定的」ではないが、アイヌの行事や事業に参加したいという気持ちを持っていない。1人はもともと「否定的」ではなかった。しかし、子どもがアイヌの容姿を受け継いでいるため、差別のことを考えるとアイヌであることを知られずに生活することを望んでいる。もう1人は、父親がアイヌの血を嫌っていたため、いっさいアイヌについて語るものがなく、あまりアイヌの伝統行事にはふれた経験がないまま育っている。「結婚する時にアイヌであることで相手の親から面と向かって反対されてアイヌ民族であることを意識するようになった」と述べており、それ以降一貫してアイヌであることに「否定的」である。現在、本人に面と向かってアイヌと言う人はいないが、アイヌに対しては未だに偏見を持たれていると感じている。そのため、「アイヌと言われたくない」と考えている。いずれにせよ、「否定的」になる要因は差別につながるようなアイヌ民族に対する偏見をいまだ社会が持っている点にある。

## (3) 「どちらでもない」

壮年層では「どちらでもない」人が25人と一番多かった。この中には和人7人が含まれる。結婚前にはアイヌ民族に対して特別なこだわりや意識はなく、配偶者であるアイヌの人の意識やその関係性から、意識の持ちようも様々である。しかし、結婚する際に配偶者がアイヌであることに特別な思いはなく、結婚してからも配偶者がアイヌであることを意識しない人が多い。ただし、子どもがアイヌであることをどう受け止めるかということへの関心が大きい。おおむね、子どもがどういう意識を持つかは子どもに任せるとこたえているものの、無関心ではられないようだ。

「どちらでもない」に属する18人のアイヌの人々の場合、「アイヌであることにこだわらない」「アイヌは特別なわけではなくみんな一緒だ」「自然体でいたい」といった発言が多く、アイヌであることを否定はしないものの、民族性は意識せず生きることを望んでいる。全体として子どもの頃のアイヌの伝統文化の体験はあまり持っていない。子どもの頃の体験がないため、アイヌの伝統文化に関わる機会が訪れ、歌や踊りをするようになってもアイヌとしての中途半端さも感じるために、積極的にアイヌとして生きるという気持ちにまではならないようだ。

これら18人のかつての意識を分類すると一貫して「どちらでもない」は10人である。その意識の形成過程を見ていくと、あまり差別の経験がないことやアイヌの文化活動に積極的に関わっていないことが共通して見られる。

過去に「否定的」であったのは8人である。彼ら／彼女らが過去に「否定的」になった要因は、主に差別された経験であった。差別の経験以外では、「父親の影響でアイヌは恥ずかしいという意識を植え付けられた」「時間に遅れたり、お酒を飲んで喧嘩したりするアイヌが多い」と話す人もいた。その後にアイヌであることについての意識が「否定的」から「どちらでもない」に変化していくきっかけとしては、「毛深いことでいじめられた経験があったが、アイヌ協会に入り、活動に触れて、アイヌの素晴らしい伝統、考え方、生き方があるのだと知った」などアイヌ関係の活動に言及する人がいた。また、「以前は外見や毛深いことを気にしていたが、夫が一切気にする人ではなく、しだいに気にしなくなった」と語る人もいる。「仕事を通して自信を持った」「成長していく過程のなかで、先祖があることで今があるというふうに前向きにとらえることができるようになった」「自分が強くなったからアイヌと言えると思う」と述べている人もいる。

彼ら／彼女らの場合、アイヌであることに否定的な思いは薄れたものの、「アイヌであることを隠しはしないが、こだわらなくていい」というように中立的な意識にとどまる。

### 第3項 青年層

#### (1) 「肯定的である」

青年層では「肯定的」である者が29人中6人であった。今現在、アイヌの伝統文化に興味を持ち、活動にも参加している。6人に共通している点は両親または親戚がアイヌ関係の活動に積極的に関わっていることである。現在の意識に至る過程を見ると6人のうち、2人が以前から「肯定的」であり、かつて「否定的」だったのは1人、「どちらでもない」は3人だった。

以前より「肯定的」であった2人は幼少期から祖母の影響でアイヌの伝統文化に深く触れている(表9-2参照)。成長過程においても民族衣装を着て歌ったり、踊ったり、またアイヌ語を習ったりという経験を重ねてきている。青年層でこのような形でアイヌの伝統文化を体験できる環境で育つことは例外的と思われる。そのうち1人はいじめの経験に言及している。しかし、自らの

活動が新聞に載り、知られるようになることで、いじめられることがなくなり、周りから理解され、仲良くつきあえるようになったと述べている。アイヌの伝統文化の継承や活動が円滑に行われるためには、アイヌの伝統文化や活動を理解する社会環境が必要不可欠である。

1人のかつて「否定的」であった者は、幼少期に身近なところにアイヌの伝統文化の環境があり、祖母はアイヌ語を少し喋り、踊りも踊っていた。しかし、小学校中学年の頃に社会科の勉強で「アイヌイコール縄文時代の人」といったいじめがあった。これをきっかけに、アイヌであることにコンプレックスを持ち、アイヌであることが嫌だという思いを抱えるようになった。両親や親戚は積極的にアイヌ関係の活動や交流に参加していたが、それにも関わりたくないと考えた。ところが、「社会人になりお正月など実家に帰り親戚等が集まると、先祖代々のアイヌ文化を受け継ぐように両親や親戚から言われるような機会が続き、そういう話が積み重なってアイヌ民族としての自覚を持ち堂々とアイヌと言えるようになった」と述べている。周りの働きかけが肯定的に作用している。親の世代が年を取り、活動が出来なくなってきているため、若い世代がそれを担っていかなければならないという気持ちも芽生えている。

「どちらでもない」から「肯定的」に変わった3人のうち、2人は札幌で生れており、成長過程でほとんどアイヌの伝統文化に接した経験がない。もう1人はまわりにアイヌの親戚がいて、アイヌの伝統文化に触れる機会は持っていたものの、その内容はかなり限られたものになっていた。いじめられた経験はあまりなく、以前はアイヌとしての意識は希薄であった。この3人が「肯定的」になっていくきっかけとして共通していることは、それぞれ母親、両親、叔父など身近な人たちが積極的にアイヌ関係の活動をしていることである。その影響からアイヌ関係の活動に関わるようになり、しだいにアイヌであることに「肯定的」な意識を持つようになっている。

以上のように青年層ではかつて「否定的」であった場合でも「どちらでもない」場合でも「肯定的」に変わっていく背景にはアイヌ関係の活動や文化活動に関わっている身近な人の存在があった。青年層の人々にアイヌの伝統文化や活動を継承していく上で、彼ら／彼女らを取り巻く老年層、壮年層のありよう、そして、青年層の人々への働きかけがとても重要である。

## (2) 「否定的である」

アイヌであることに現在「否定的」であるのは3人であった。そのうち1人は和人でアイヌの養女として育てている。3人とも過去の意識も「否定的」であり、変化が見られない。1人は大人になるまでアイヌであることを知らずに育ち、社会に出てから自分の血筋を知り、同時に差別もわずかではあるが感じた。現在もアイヌであることを知られたくないと考えている。そして、自身がアイヌ民族について知らないことも「否定的」である一因となっている。他2人についても「否定的」になる要因は差別にあった。1人は学校の授業で家系図を作ったことがきっかけでいじめられた経験があり、現在も変わっていない。もう1人は中学校の時にアイヌをからかったり、いじめたりしているのを見たことがトラウマとなり、アイヌとは関わりたくないと考えている。1人は和人と結婚しており、他の2人もとくにアイヌの伝統文化と関わる機会は得ていない。

## (3) 「どちらでもない」

「どちらでもない」が29人中20人と一番多い。その中でかつて否定的であった1人は小学校の時に「アイヌ」と言われ、「アイヌだからバカにされる」と思っていた。そして「小さい頃むかわのお祭りで酔っぱらってふらふらしているアイヌを見て、アイヌはカッコ悪いというイメージを

持った」と述べている。その後はとくに差別された経験はなく、仕事においてアイヌであることで苦労したこともない。アイヌであることで困ったこともないので、何も望んでおらず、普通に生活できればいいと考えている。アイヌであることを隠そうとは思っていないが、アイヌの文化活動に参加するまでには至っていない。

他の19人は一貫して「どちらでもない」という意識で現在に至っている。差別を受けた経験はほとんどない。アイヌであることは親から聞いたり、まわりにアイヌの人々がいたため自然に感じていたりして、自らがアイヌであることを認識した。アイヌの伝統文化にほとんど触れた経験を持っていないため、アイヌであることを意識することなく育ってきており、アイヌであることを意識する必要性を感じていない。奨学金を受給することがきっかけでアイヌであることを知った人の場合、「日本人として普通に生きてきたままアイヌの血が入っただけ。アイヌ文化を広げるという使命感もない。アイヌ民族と日本人の壁はない」と述べている。また、「アイヌである、ないというように考えるのは好きではない。人間同士普通につきあうのがいい」という発言に見られるように、アイヌである、和人であると区別することに違和感を抱いている。

一方、彼ら／彼女らの場合、アイヌであることに「肯定的」でも「否定的」でもないため、きっかけさえあれば、アイヌの伝統文化やアイヌとしてのアイデンティティを受容する可能性は少ない。たとえば、アイヌの血を引いている事を知ったことで、逆に「アイヌの文様の入っているブレスレットが好きである」「山菜を取りに山に入った時や虫を取るのが早かった時などに狩猟民族の血が入っていると感じた」「自然が多いところで感動する点などアイヌ特有なのかと思う」などの発言も見られる。アイヌの伝統文化に触れた経験がないために、自らの率直な感じ方からアイヌとしてのアイデンティティを持つ可能性もうかがえる。また、差別されることを避けるためにアイヌであることを隠すのではなく、「アイヌであることを隠そうという意識はないが、アイヌでありながらアイヌのことを知らないためにアイヌであると言えない」との発言がある。裏を返せば、アイヌについて知ることでアイヌとして積極的に生きるという選択をする可能性が見える。

なかには、「先住民の血が入っていて、ちょっとかっこいいかな」「アイヌが少数であるため自慢かなと思う」と述べる人もいた。「娘はハーフだと言って喜んだ」など、同じような傾向は今回の調査対象者の子どもの世代に見られた。「アイヌであることで差別される」というこれまでの意識をまったく持たない世代も現れている。

#### 第4項 まとめ

以上、世代別にアイヌとしての意識の形成・変容過程を見て来た。そこから、アイヌであることに「否定的」になる主な要因は差別にあることが明らかになった。とくに、幼少期や学校時代に差別された体験がもつ意味は大きかった。若い世代でも数は少ないが差別は経験されており、また親として子どもが差別を受ける不安はいまだ拭き切れないというのが現状である。

しかし、これらの意識は固定的なものではなかった。その後の人生の中で、①アイヌに理解のある身近な人、とくに配偶者と出会えたかどうか、②アイヌ文化活動に参加したり、アイヌ関係団体に積極的に関与したりする機会があったかどうかによって、人生の初期に形成された意識が変化することが多かった。アイヌに理解のある人に出会ったり、アイヌ文化活動などに参加したりする機会は、対象者自身からも語られたように、③社会全体のアイヌに対する認識が肯定的な

方向で変化してきたことにより、増大してきたと見なすことができる。

以上の点をふまえると、世代が上がるにしたがって、アイヌであることに対する意識が「肯定的」な方向で変化しがちであったのは、老年層・壮年層と青年層で意識の形成・変容過程が異なっていたからであるといえる。つまり、老年層や壮年層の場合、かつて差別が激しい時代に差別された体験により、アイヌであることに「否定的」な意識をもち、時代の変化とともに、すでに述べたようないくつかのきっかけによって、「否定的」な意識が払拭されていくことが多かった。これに対し、青年層は、かつてと比べ、差別される経験は少なくなったものの、アイヌの伝統文化や生活様式を体験する機会をもたない者が多く、アイヌであることに「肯定的」でも「否定的」でもない傾向が主流となっていた。そのため、現時点で「肯定的」な者が青年層よりも壮年層・老年層に多く見られたのである。

しかし、差別される経験は確実に減って来ている。この傾向がより確実なものになれば、アイヌであることに「否定的」になる要因は少なくなっていく。青年層の場合、そもそも、過去も現在も含めて、「否定的」な意識を一貫してもっている者は少数派であり、「どちらでもない」という意識が主流であった。そのため、きっかけさえあれば、「肯定的」な意識が形成される可能性は高いと考えることができる。

### 第3節 アイヌ文化の実践とアイヌとしての未来

#### 第1項 アイヌ文化の実践

すでに見たように、世代の違いに関わりなく、アイヌ文化への関わり方は、アイヌであることに対する意識の形成・変容にとって、大きな意味をもっていた。そのため、アイヌ文化への現在の関わり方や将来の希望を明らかにすれば、アイヌとしてのアイデンティティの未来のあり方を予想することが可能になると考えられる。

この点をふまえ、現在実践しているアイヌ文化の有無と今後実践したい文化の有無について、表9-3のようにまとめてみた。

表中、「実践している文化がある」については、普段実践している場合から何回か実践したことがある場合まで幅広くとらえている。また、「今後実践したい文化」も、具体的に関わりたい文化を特定している人から漠然と「アイヌ文化を知りたい」「興味がある」「余裕ができたならやってみよう」と語る人まで含んでいる。

その結果、現在「実践している文化」の有無について、「あり」とする人は老年層で75.6%、壮年層で69.0%、青年層で48.3%となり、世代が若くなるにつれて減少している。とくに、老年層・壮年層と青年層との隔たりは大きい。若い世代で現在アイヌ文化を実践している人の数が激減していることがわかる。このことは若い世代のアイヌとしての意識の希薄さとも符合している。

「実践している文化」の具体的な内容を見ると、世代に関係なく、男性でアイヌ語、木彫り、イナウ作成、カムイノミ、イチャルパなど、女性でアイヌ語、歌、踊り、刺繍、オハウ等の料理、カムイノミ、イチャルパなど、多岐にわたっている。これらは日常的に実践されている場合もないわけではないが、アイヌ協会やアイヌ文化振興財団等の諸団体が企画した行事や研修会等に参加する形で実践されていることが多い。

ただし、各世代とも現在のアイヌ文化への関わり方について、課題と感じられていることもある。

表9-3 アイヌ文化の実践について

単位：人、%

世代	実践している文化		今後実践したい文化	
	あり	なし	あり	なし
青年 (29人)	14 (48.3)	15 (51.7)	24 (82.8)	5 (17.2)
壮年 (42人)	29 (69.0)	13 (31.0)	38 (90.5)	4 (9.5)
老年 (41人)	31 (75.6)	10 (24.4)	35 (85.4)	6 (14.6)
合計 (112人)	74 (66.1)	38 (33.9)	97 (86.6)	15 (13.4)

注) ( ) は各世代全体に占める割合。

老年層では体調不良のため、あまりアイヌの文化活動に関われなくなってきたこと、またアイヌ文化を伝承していかななくてはならないことが述べられている。壮年層と青年層の場合、現在仕事が忙しいため、現実的に生活の中でアイヌ文化活動に関わる余裕がないと語る者が目についた。

現在アイヌ関係の仕事に携わっている人々や積極的にアイヌ文化活動に関わっている人々とアイヌ関係の仕事や文化活動に関わりが少い人との意識の隔たりも大きい。

アイヌ文化活動に積極的に関わっている人は、アイヌの精神を大切にすることとアイヌ文化の伝承をして行かなければならない点に言及している。一方、アイヌの伝統文化に触れた体験を持っており、アイヌの精神を大切にしつつも、現在行われているアイヌ文化活動に対して批判的で参加せず、離れた距離から活動を見ている人々もいる。また、現在行われている文化活動は特定の人が行っているため、参加するのがむずかしいと述べている人もいた。「アイヌの人々は閉鎖的である」という若い世代からの指摘もあった。

しかしながら、今後「実践したい文化」に目を移すと、老年層 (85.4%)、壮年層 (90.5%)、青年層 (82.8%) の間にあまり違いが見られず、多くの者が「実践したい文化」があると答えている。

今後「実践したい文化」の内容は、いずれの世代でも、カムイノミやイチャルパなど伝統的な祭事や先祖供養が少なくなり、工芸 (編み物、刺繍、織物、木彫り等)、歌・踊り・楽器、アイヌ語など「学ぶ」内容が主流になる。青年層の場合、とくにその傾向が強い。

以上のように、現時点でアイヌ文化を実践している者は、老年層や壮年層が中心で、青年層はアイヌ文化との接点が少なかった。しかし、世代に関係なく、多くの者が今後はアイヌ文化を学びながら実践したいとの希望をもっていた。それは、アイヌであることに対する意識が、「肯定的」な方向で変化する可能性が高いことを示唆している。

## 第2項 アイヌとしての未来

だが、アイヌ文化への興味の高まりは、アイヌとしての意識を変える可能性を間接的に示唆しているにすぎないことも事実である。そのため、より直接的にアイヌとしての意識の将来像を検討する必要がある。

表9-4は、この点をふまえ、調査対象者が今後について言及している部分から、アイヌとしての未来の意識のありようを予想してまとめたものである。

具体的には、今後の生活の仕方として、「アイヌとして積極的に生きていきたい」「とくに民族は意識せず生活したい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」「その他」の選択肢によって尋ねた質問への回答や「今後関わってみたいアイヌ文化」に関する回答を中心に各自のアイヌ

表9-4 アイヌであることに対する未来の意識

単位：人

世代	現在			未来			現在	未来		
	肯定的	否定的	どちらでもない	肯定的	否定的	どちらでもない		肯定的	否定的	どちらでもない
青年 (29人)	6	0	0	6	3	0	20	10	0	10
壮年 (42人)	15	0	0	15	2	1	25	9	0	16
老年 (41人)	24	0	0	24	2	1	15	3	0	12
合計	45	0	0	45	7	4	60	22	0	38

としての将来意識を把握した。

その結果、どの世代においても「肯定的」である人々は、例外なく将来にわたって「肯定的」であり続けることがわかった。そして、「否定的」である人々についても、社会のアイヌ民族に対する理解が深まり、差別されることへの危惧がなくなれば、「肯定的」にはならないまでも中立的な意識になる可能性が見いだされた。各世代に1人ずつそれに当てはまる人がいた。「どちらでもない」人々については、世代が若くなるほど「肯定的」になる可能性が大きかった。「どちらでもない」から「肯定的」に変化すると予測できるのは、老年層で15人中3人、壮年層で25人中9人であるのに対し、青年層では20人中10人に達していた。

ただし、いずれの世代においても、「どちらでもない」層に属する人々の中に、将来も「どちらでもない」との立場になると考えられる人々がいる。いわば、「アイヌも和人も同じ人間」という中立的な立場で生きていきたい人たちである。これらの人々の中にも、アイヌ文化に興味をもち、伝統的な文化を「学び」たいと考える人もいる。しかし、少なくとも、アイヌ文化に対する関心とアイヌとしての意識の将来像が結びついていないのが現実である。

逆にいえば、アイヌ文化がアイヌだけのものではなく、脱アイヌとして生きる人々にとっても「学ぶ」価値があるものとして、とらえられていると考えることもできる。それだけ、アイヌやアイヌ文化に対する社会の認識が変化してきたといってもよい。アイヌとして生きるのが困難な時代からアイヌ文化が見直される時代の変化の中で、改めてアイヌとしてのアイデンティティのあり方が問われているといえよう。

## おわりに

ここまで、アイヌとしてのアイデンティティの内実、その形成・変容の要因、および未来について検討してきた。

その結果、アイヌとしてのアイデンティティは現時点多様な内実をもっていたことが明らかになった。実際、アイヌであることに「肯定的」な人、「否定的」な人、そして「どちらでもない」人がいた。

しかし、それらの意識は、固定的なものではなく、アイヌであることに対して「否定的」な意

識から「肯定的」な方向へ変化を遂げていた。かつての差別の体験により「否定的」な意識をもっていた人々の多くが、アイヌであることに対して「肯定的」な意識をもつようになっていた。

その背後に、アイヌに対する社会の認識の変化があったことは間違いない。時代とともに、差別と偏見に満ちた社会の意識が徐々に改善され、アイヌ文化振興法の制定に象徴されるように、アイヌの伝統文化の価値が見直されていったことは事実である。その結果、理解のある身近な和人との出会いが生まれる機会、また改めてアイヌ文化活動・アイヌ関係団体に参加・関与する機会をえることができ、それによって、自らのアイヌとしての意識が「肯定的」な方向で変化していった者が少なくなかった。

さらに、現在、アイヌ文化を実践していない人たちであっても、将来、アイヌ文化を実践したいと考えている人たちが少なからず存在した。現時点でアイヌとして「肯定的」な意識を持っていない人も含めて、多くの人々がアイヌ文化に対して興味・関心をもっていた。そこから、アイヌとして「肯定的」な意識をもつ人が将来増加していく可能性が見いだせた。少なくとも、「否定的」な方向でアイヌとしての意識が変化する可能性は考えられなかった。

だが、同時に、将来のアイヌ文化への興味・関心が、「肯定的」な意識の形成につながらない可能性も示された。アイヌとしてのアイデンティティを脱却した上で、アイヌでも和人でもない立場で、アイヌ文化を享受したいと考える人たちが、青年層を中心に現れる可能性が浮かび上がった。アイヌとしてのアイデンティティのゆくえは、ここで明らかになった可能性がどのように実現されていくのかによって、決まっていくことになるだろう。

アイヌとしてのアイデンティティは変化していくものであり、今後ともそのゆくえに注目していく必要がある。

(小内 透・長田直美)